

## 《紹介》

## 医学における鍼灸の役割について

Dr. H.-T. Chang（張香桐）

中村 清訳

## “Comments on Roles of Acupuncture in Medicine” (Lecture)

by Dr. Hsiang-Tung CHANG\*

Translation by Kiyoshi NAKAMURA, Ph. D.\*\*

\* Director of Shanghai Brain Research Institute

\*\* Department of the Humanities and Social Sciences, Meiji College of Oriental Medicine

近代世界文明の型は、様々な人種に分かれた人類の知識と偉業が結集され、絶え間ない相互作用を繰返すことによって、歴史的に形成されております。この形成過程は、過去においては長年月を要しましたが、現在は情報伝達技術が近代になって急速に発達を遂げたことにより、大幅に加速されております。

周知のように、中国の伝統的医学は、古代中国人民の有していた医学的知識の豊かな蓄積でありまして、理論と実践の双方において西洋医学と相違しております。人類の保健と福祉のために、東西の医学を一つの世界的医学に統合することは、今日の世代の責務であります。

中国伝統医学は、大まかに言って、二つの主要部分から成っております。すなわち一つは鍼灸術、もう一つは、薬草が中心ではありますが、自然の産物で造った液剤、丸剤、散剤の投与を含む薬草学であります。中国伝統医学における鍼灸術は、その発展の当初から、薬物療法に比べて、実践においても思想においても、より重要な、もしくはより一層主導的な地位を占めておりました。全身

に張りめぐらされていると仮定された経絡を通じての「気」の循環の概念とか、体内の「陰と陽」の互いに拮抗する二つの力の調和という概念、さらに医学思想の全理論体系さえ鍼灸術から導き出されたものであることは明らかであります。こうしたことを念頭におけば、鍼灸術の理論的および実践的問題についての論議が、中国医学の古典である「内経」の内容の大部分を占めているとしても怪しむには当たらずであります。疾患の薬物治療のその後の発展も、鍼灸術のために立てられた理論を基礎にしておりました。だから中国医学の初期の発展段階における鍼灸術の優位は、以後ゆらぐことがなかったのであります。

鍼灸術がなぜ薬草学に先んじて発展したのかについては、医学史上なお議論の余地があります。ここではこの問題に深く立ち入ることはせず、ただ鍼灸術の方が単純で安全な、かつ可視的な治療法であって、化学の深い知識がなくとも取り扱えたという点の指摘に留めたいと存じます。

鍼灸術は、通常様々な種類の疼痛の対症療法的軽減に、痛みの原因とは無関係に、用いられるこ

とが多いのであります。これは今後とて同様でありましょう。鍼灸術の治療効果は広く喧伝されてはきましたが、鍼灸術が有効に用いられる疾病の範囲は、通常ある型の疾患、例えば神経機能障害による疾患、ホルモンの平衡失調、婦人科疾患、老人性症状などに限定されます。また場合によっては、病原性生物による疾患にも用いられます。

一般の見方では、鍼灸術は再生不能な器質的損傷を含む疾患、例えば視神経萎縮に由来する白内障とか、聴神経変性による難聴などに対しては無効だとされております。そうした症状については、鍼灸術に奇跡を期待してはなりません。鍼灸術は、本質的に言って、身体の諸部位の可逆的、生理的機能不全を、生理学的手段を用いて修復する技術であります。

将来、鍼灸術が有効に用いられる疾病の範囲は、主として人体の神経およびホルモンの作用異常に関係する症例に限られることになりましょう。その理由は、鍼灸の基本的作用が、中枢神経系の働きによる生理的機能障害を調整することにある、と考えられるからであります。鍼灸によって発生するインパルスは、身体の有するホメオスタシス効率と自己防衛機構を回復させるために、自律中枢と下垂体系を活性化することができる、と考えられております。

刺鍼の後、17ケテストステロイドの尿中分泌が著しく増加することが証明されております。同様に、ヒドロコルチソンの血中濃度の増加も証明されました。血液の抗体タイター値の持続的増加や、刺鍼後の食菌作用の強化の報告もありました。こうした観察が確認されることになれば、感染症やホルモン異常に起因する疾患に対する刺鍼法の効果の説明としてさまざま役立つことになりましょう。

恐らくは患者のためを思って、身体の恢復力や防御力を最大限に高める必要から出たことだと思われませんが、中国の医師たちは、鍼灸術に常に薬物治療を併用してきました。皆様もよくご承知のように、現在の中国では、多くの病院で広く複合治療が実施されております。これは何も目新しいことではありません。鍼灸術と薬物療法の併用は、

古代中国人医師たちから継承した医学的伝統の一つであります。古典医学年代記の一つである、1601年発行の「医案」（楊繼周の著になる症例研究書）には、36の症例報告のうち13例が著効を示した鍼灸と薬物療法の併用であり、残りのすべては薬物治療の不首尾の後にはじめて鍼灸のみを用いた、と記されております。

近年の医学における鍼灸術の再発見、鍼灸に対する関心の再燃は、注目すべき反響をまき起しました。一般に中国医学は、中国医療人たちの積年の経験の蓄積であって、雑多な事項をつきまぜた、永遠の価値についての知識と概念まで含めたものだと考えられております。巨大な砂丘の中に埋もれた幾粒かの金の粒を探すことに何ほどの価値があるだろう、と疑う人もおりましょう。

先入観は抜きにして、鍼灸術の鎮痛効果にも治療にも科学的根拠がある、と私は認めざるを得ません。20年におよぶ研究の結果、鍼鎮痛作用の神経生理学的機序は次第に解明されつつあります。近代医学は、中国伝統医学をただ単に参考とするにとどまらず、鍼灸術を可能な限り代替法としても受け容れることになるであります。

近代医学への鍼灸学研究の貢献で無視できぬもう一つのコトは、疼痛およびその制御に関する神経機構の理解を大幅に前進させてくれたことあります。科学の歴史の中では、研究目標には何らかの理由で到達できなかったのに、検討の途上ではからずも、当初の目論みよりもっと重要であることが証明されるような別の結果が生み出されたことがよくありました。取穴、さらには鍼灸治療法の理論的根拠となっている経絡理論の真の本性や物質的基礎の解明は、まだ本当に成功したとは申せません。しかしながら鍼鎮痛効果の研究の過程で、疼痛を生ずる基本的機序の理解とその制御に大きな進展が見られましたが、そのことは恐らく鍼灸術それ自体を越えて、はるかに大きな生理学的かつ臨床的意義を有するであります。そして現在、中枢神経系に疼痛情報を伝え、統合することに関係している神経回路と中枢での過程を理解するに到る曙光がようやく見えてきたところ

ですから、なおさらのことです。さらにまた我々は、鍼鎮痛作用における内因性阿片様物質の関与を実証することにより、疼痛化学の新分野に通ずる戸口に立っているところなのであります。世界各国の多くの実験室において、研究作業が進行しております。それが将来どれだけの衝撃を医学に与えることになるか、現在はまだ語るに時期尚早であります。

鍼灸術が、どんな疾患に対しても確実な万能治療法などではないことは認めなければなりません。鍼灸施術に常に適応してきた症例についてさえ、時として失敗することがあります。その理由としては、個体差のほかに、我々には制御不能な、多くの外因性および内因性因子が患者の中に必ずあるからであります。失敗は、いずれの治療法でも起り得ます。鍼灸術にのみあるものではありません。この特殊な治療技術に対する信頼をなくしてはなりません。我々は、近代医学の巨匠サー・ウィリアム・オスラーの鍼灸術に対する態度を、前例として見做すべきではないでしょうか。

モントリオール総合病院に若手医師として勤務していた当時、オスラーはレッドパスという名の裕福な地元有力者の腰痛治療に鍼灸術を適用することになりました。しかし結果はみじめな失敗でした。このはじめての鍼灸施術におけるオスラーの大失敗の様子を、ハーヴェイ・クッシングはその名著「サー・ウィリアム・オスラーの生涯」の中で、次のように描写しております。

「……ところが、これらの診療の中の1件はいろいろ準備を要し、またオグデンが助手として駆り出されるほど重要なものであった。それは、その患者がほかならぬ老ピーター・レッドパスその人、裕福なモントリオール砂糖精製業者だからであり、モントリオール総合病院の重役たる彼が、新任の医師は自分の難治の腰痛を治す力を有すると期待していたからである。

彼は階段を登り、疲れきった姿で現れた。医師たちは、決められた手順に従って鍼灸施術を進めたが、それは毎日そこで行われている通常の処置で、腰部の筋肉に長鍼を刺し入れるものであった。

その老紳士は、刺鍼の度に呪いの言葉を並べたてたようであるが、遂には痛みの消えぬまま起き上って、よろめきながら出て行った。このことはオスラーをいたく打ちのめした。彼はマクギル大学にとっては100万ドルものだと言って、即効があると予想していたからである」。(Harvey Cushing: The Life of Sir William Osler. Oxford University Press, 1940, p.117)

この事件があったのは、1877年のことでした。しかし鍼灸術に対するオスラーの確信は、レッドパスというこの特殊な症例で味わされた失望でもゆらぐことはありませんでした。40年後、彼は確信に満ちて、腰痛に対する最も効果的な治療方法は刺鍼である、と力説しています。この言葉は好評を博した彼の教科書「医学の原理と実践」の中の次のような箇所に見られます。

「腰痛に対して、急性の場合、最も効果的な治療法は刺鍼である。長さ3乃至4インチの鍼（通常のボンネット針を消毒して用いてもよい）を、痛む患部の腰部筋肉に刺し入れ、5分もしくは10分後に引き抜く。多くの場合、痛みはただちに軽減する。また多くの場合、その著しい、そして迅速な効果について、この実地を教えてくれたリンガーの治療法を、私は確証できる。平流も、時には極めて有益である」。(William Osler: The Principles and Practice of Medicine, London, 8th Edition, 1922, p.1131)

サー・ウィリアム・オスラーが今日なお健在で、近年における鍼灸学研究の努力と進展を目のあたりにしたら、さぞや驚喜し、鍼灸術について自分が教科書に書き記したことを回想して、満足のほほえみを浮べることでありましょう。

#### 《解 説》

これは、京都で開催された第10回国際脳波・臨床神経生理学学会（昭和56年9月）の学会ツアーの一部として、明治鍼灸短期大学で行われた張香桐博士の講演

Dr. Hsiang-Tung CHANG: Comments on Roles of Acupuncture in Medicine (Lecture)

の邦訳である。

博士は著名な神経生理学者で、上海脳研究所の所長の地位にあるが、この講演の中に20年にわたるその鍼灸研究の成果の一端が語られている。中枢レベルでの痛みとその制御に関する先導的研究が、鍼の鎮痛作用の神経生理学的機構の理論的解明の土台になっており、鍼灸治療法全般の理論的理解の今後の進展に大きな希望がもたれている。

鍼灸の治療的可能性と限界については、博士は冷静な科学者としての目で論じており、その科学的解明はまだようやく端緒についたところだとされているが、先例として、ピューリッツァ賞を受けたクッシングの名著「サー・ウィリアム・オスラーの生涯」の中のオスラーの鍼灸への確信を見倣うようすすめているのは、控え目ながら、鍼灸治療法の科学的根拠を自ら認識した人の未来への展望の言葉であって、本大学での鍼灸学研究の推進への指針ともなるものである。

なお、鎮痛作用の神経生理学的解明に関係する博士の論文および講演を以下にあげておく。

- 1) Chang, H.-T. : Integrative action of thalamus in the process of acupuncture analgesia. *Scientia Sinica*, 16 : 25~60, 1973.
- 2) Chang, H.-T., Ho, S.-F. and Chao, C.-C. : Single unit discharges in parafascicular nucleus to severe radiant heat stimulation. *Publications of Theoretical and Clinical Studies on Acupuncture Analgesia*. Shanghai Peoples Press, pp.167~170, 1977.
- 3) Chang, H.-T. : Neurophysiological basis of acupuncture analgesia. *Scientia Sinica*, 21 : 829~846, 1978.
- 4) Chang, H.-T. : Interaction in thalamus of afferent impulses from acupuncture point and site of pain. *Chinese Med. J.*, 93 : 18, 1980.
- 5) Chang, H.-T. : Neuronal connections of intralaminar nuclei with motor cortex. *Proceedings of Shanghai Workshop on Neurobiology*, 1980.
- 6) Chang, H.-T. : Pain related neuronal discharges and their modification by activity of centrum medianum. 脳波と筋電図, 31 (Didactic Lectures, 10th ICECN) : 133~136, 1981.